

# 博士學位論文審査要旨

2021年6月19日

論文題目：自由と解放の身体文化——独立戦争期キューバにおける野球

学位申請者：山本 航平

審査委員：

主査：文学研究科教授 山田 史郎

副査：グローバル地域文化学部 教授 落合 明子

副査：慶應義塾大学経済学部 教授 八嶋 由香利

要 旨：

本論文は、19世紀末に米国の影響力がいや増す時期にスペインからの独立をめざしたキューバにおいて、米国発祥の野球がいかに受容されたかを探る。

第1章と第2章は、1860年代後半以降に野球が普及していく過程で、植民地生まれのエリート層が、前近代を象徴する娯楽である闘鶏や、宗主国スペインの「後進的」文化である闘牛に対置させて、近代文明化社会の理想の娯楽として野球を認識したことを、多様な新聞・雑誌の記事や小説の分析を通して明らかにする。女性も観戦できる上品で洗練されたスタジアムで、秩序と公正を尊ぶ身体文化として野球を賞賛する言論の台頭が具体的に例証される。

野球が植民地体制の転覆と独立を含意する合言葉と化していくとする議論は、野球に関する「科学的」言説に焦点を当てる第3章に引き継がれる。医師や医学者は野球がキューバ人の知・徳・体の育成に有益であると訴え、社会進化論者は適者生存の競争的近代世界を生き抜く「男らしい」心身を養う効用を野球に見いだしたことが、医科学雑誌の関連記事によって論証される。

第4章と第5章はそれぞれ亡命者と黒人に焦点を当てて、両集団が自由と解放を追求する運動の<アリーナ>として野球を活用する姿を活写する。独立運動に参加したフロリダ在住の亡命キューバ人にとって野球は故郷と亡命者同士を結び付ける絆となり、野球を通じて募金活動を展開し、故郷への遠征試合の際に資金や情報の提供を試みた。黒人は、人種間相違の存在を認めない独立・建国の理念のもとで頑強な抑圧に直面しつつも、黒人選手だけのチームを結成して白人専有の野球界に衝撃を与え、不平等社会の是正をめざしたことが浮き彫りになる。

独立したキューバは20世紀前半を通して半ば米国の植民地の状態に置かれることになるが、進歩と自由と解放を体現する文化として慈しまれた野球は、国民的スポーツとしての揺るぎない地位を保持していくことが、結論で指摘される。現地キューバの公文書館等での集中的な史料の収集と解説にもとづいて丁寧に実証的考察を積み重ねたことは、十分な評価に値する。また、史料として野球に関する記述を活字で残したエリート層の言論に依拠せざるをえなかったとはいえ、亡命キューバ人労働者や黒人の能動的関与にも新たな分析の光を当て、外来文化の主体的解釈の観点から国民国家樹立にともなう文化形成の再考察を試みたことなどの学術的意義は小さくなく、近代ラテンアメリカ文化史の研究に新たな視座を提供するものと信じる。よって、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位を授与するに値するものと判断する。

## 総合試験結果の要旨

2021年6月19日

論文題目： 自由と解放の身体文化——独立戦争期キューバにおける野球

学位申請者： 山本 航平

審査委員：

主査： 文学研究科教授 山田 史郎

副査： グローバル地域文化学部教授 落合 明子

副査： 慶應義塾大学経済学部教授 八嶋 由香利

要 旨：

上記審査委員は学位申請者に対して、2021年6月19日（土）午前10時から約2時間にわたり口頭試問をおこなった。

学位申請者は、提出論文の内容に関する審査委員からの質疑に対して、適切かつ詳細な応答をおこない、その結果、本論文の学術的価値を示した。さらに、質疑応答を通して、学位申請者が専門分野に関する幅広い学識と深い洞察力を有していることが証明された。

また語学（英語とスペイン語）に関しては、関連する研究論文や研究書の内容を的確に把握できていることや、新聞や雑誌等の一次史料を微細にわたって分析できていることが確認された。学位申請者が研究上要求される言語について読解能力と運用能力を十分に有していると判断できる。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： 自由と解放の身体文化——独立戦争期キューバにおける野球

氏名： 山本 航平

要旨：

本論文「自由と解放の身体文化——独立戦争期キューバにおける野球」は、宗主国スペインに対する2度の独立戦争（1868-78年／1895-98年）が勃発した19世紀末キューバにおいて、米国発祥の文化である野球がどのように表象され、実践されたのかを考察した。現在ではキューバの「国技」として定着している野球が、近代キューバにおいていかなる意味を付与された文化であったのかを問うことは、キューバ国民文化の形成という問題に接近するためのひとつの手がかりとなる。

従来の歴史研究において、中南米と米国、あるいはキューバと米国の関係は、おおむね政治、経済、外交分野から理解されてきた。米国は中南米諸国に対して覇権を握り、支配—従属の関係を構築したが、そのようなアメリカ大陸の「南北問題」は、中南米諸国で民族主義や反米主義が生まれた要因のひとつであった。また、中南米諸国を対象とする研究者は、なぜその地域が低開発に置かれたのか、あるいはその現状はいかにして乗り越えられるのかという問題意識を有してきた。したがって、中南米地域をあつかう研究は、それらを解明しうる政治学・政治史と経済学・経済史が主流であり、文化やその歴史は二次的なあつかいを受けてきた。キューバと米国の関係にかぎっても、軍事介入や砂糖産業などへの経済投資によって米国がいかにキューバに権力を行使したのかという側面や、両国政府の対立や外交交渉の過程が注目を集めてきた。

ルイス・ペレス (Louis A. Pérez, Jr.) らによる研究蓄積があるとはいえ、キューバ文化史研究において、米国の影響力に注目したものはいまだごくわずかにとどまっている。その理由のひとつとして、キューバ文化はアフロキューバ文化とほぼ同一視されてきたことがあげられる。アフロキューバ文化とは、スペインの文化と奴隷貿易によって連れて来られた黒人が持ち込んだアフリカの文化がキューバで混雑して誕生したものを指し、宗教、音楽、芸術、文学、ダンスなどの領域に顕著にみられる。先行研究が指摘するように、キューバではアフロキューバ文化が優位性を保持していると考えられている。

しかしながら、キューバ文化について考える際には、スペインかアフリカか、またはその混雑かという図式ではかならずしもその全体像を把握することはできない。キューバ文化史研究でアフロキューバ文化研究が主流であること、キューバと米国の関係が経済、政治、外交面から議論される傾向が強いこと、そしてキューバと米国が歴史的に特異なつながりを結んでいることをふまえると、キューバ人が米国発祥の野球をどのように受け入れたのかを明らかにすることには研究史上の大きな意義がある。本論文は、キューバの文化史家フェリックス・フリオ・アルフォンソ・ロペス (Félix Julio Alfonso López) の野球に関する一連の研究をふまえて、それを継承・発展させた。

第1章では、キューバ野球の起源や野球が導入された時期に近代化が進んでいたことを確認したのち、野球に興じたのが誰であったのかを、闘鶏のそれと比較しながら論じた。野球選手、チーム役員、メディア関係者の大半は中上流階級の白人男性だったが、下層階級の人びとや女性も観客としてスタジアムに足を運んでいた。少なくとも男性のクリオーリョ (キューバ生まれの人びと) にとって、「調和」や「協調」を表象する女性が野球に携わっていることは、「粗野」で「前近代的」な闘鶏と比べて、野球がいかに「優雅」で「近代的」かを喧伝する根拠になると考えら

れた。闘鶏を蔑む一方で野球を称賛する言説が生み出された背景には、娯楽や習俗を近代化することで前近代性を克服し、リスpekタブルな市民社会の成立を目指す人びとの思惑があった。

第2章では、野球と闘牛を二項対立的な枠組みで把握していたクリオーリョの言説を分析した。彼らにとって、「スペイン的なもの」を象徴する闘牛は「野蛮」や「後進性」を想起させる文化であり、それに対して米国を象徴する野球は「洗練」や「進歩」といった概念と結びつけて語られた。クリオーリョが闘牛を糾弾する一方で野球を称賛したことは、自らがペニンスラール（スペインで生まれたのちにキューバにやって来た人びと）より劣位に置かれていることへの不満を表明し、スペインからの文化的自立を宣言する戦術であった。

第3章では、なぜ野球を通じて身体を鍛えることが重要視されたのかを明らかにした。それは医学や科学の知見と不可分であり、ゆえに社会進化論を学んだ人びとや医師は、野球がいかに意義深いスポーツかをたびたび強調した。社会進化論者にとって、「自然淘汰」や「適者生存」は自然の摂理であり、その法則下で生き残るためには優れた個体でなければならないと考えられた。そのような人びとがもっとも有用な手段として注目したのが、身体と精神の両面を鍛えうる野球であった。野球を実践することを通じて「自然淘汰」の過程で勝利者になる必要があると謳われた背景には、黒人を含めた下層階級のクリオーリョやペニンスラールに対する白人クリオーリョの階級的・人種的な偏見があった。

第4章では、米国フロリダ州キーウエストのキューバ人亡命者コミュニティにおいて、いかに野球が実践されたのかについて論じた。そのコミュニティに生きた人びとにとって、野球は亡命者同士の紐帯を強化する役割を担っていた。亡命者は、野球の遠征試合を通じて、祖国の人びともトランスナショナルな共同体意識を醸成した。それは、キーウエストとキューバが同じ文化圏を構築し、フロリダ海峡をボーダーランドとする野球＝独立運動共同体が形成されたことを示している。野球の試合であげた利益を独立運動に寄付していたように、キーウエストの亡命者は祖国の独立運動に大きな貢献を果たした。亡命キューバ人は、「自由」、「平等」、「民主主義」といった米国の理念の真髄を野球にみたのである。

最後に、第5章では、黒人がどのように野球に関わっていたのかを検討した。19世紀末に野球をプレーした黒人選手は多くはなかったが、彼らは黒人だけで構成されるチームを結成し、セカンドリーグなどに参戦していた。しかしながら、黒人が野球をプレーすることを快く思わない白人は一定数存在しており、黒人は1900年までトップリーグでプレーすることはできなかった。黒人野球チーム〈サンフランシスコ〉はその壁を破り、黒人チームとして初めてトップリーグに所属したが、その後も「人種」は争点であり続けた。人種間の平等を求めて闘う黒人野球選手の奮闘をたどるなかで、暗黙のうちに黒人隔離を了解する白人社会の本質が浮かびあがった。

全5章を貫く問題意識は、独立戦争期のキューバにおいて、野球というテキストにどのような意味が付与されたのかを探ることで、アフロキューバ文化に着目する傾向が顕著であるキューバ文化史研究に新たな視座を提供することであった。19世紀半ばまでのクリオーリョは、「キューバ人であること」とは「スペイン人でないこと」だと考えていた。彼らにとって、「キューバ」とは何かを明確にしたうえで積極的に意味づけることは容易ではなく、否定神学的に定義するほかなかった。それを解決する糸口を与えたのが、1860年代にキューバに持ち込まれ、まもなく爆発的に普及した野球であった。

野球は19世紀末のキューバ人が憧憬のまなざしを向けていた米国で誕生した文化であり、彼らは「米国化」することでスペインとの差異を形作ろうとした。しかしながら、結果的には米西戦争後に軍政下に置かれるとはいえ、キューバ人は米国への政治的な従属やその支配圏に入ることを望んでいたわけではなく、「米国化」とはあくまでも文化的な意味においてのみであった。換言するならば、キューバ人は「近代」を体現する米国の文化を借用し、それを介して米国の理念や価値観を参照し、国民国家を形成するプロセスにいた。キューバ人は、スペイン植民地支配からの自立と解放を導く身体文化として野球を規定したのである。

もちろん、キューバの野球にそのような側面があったことを無批判に称揚することは、危険性をはらんでいる。なぜならば、キューバは1898年の米西戦争以前から砂糖の輸出を通して経済的に米国に従属しており、米西戦争後は米国の軍政下に置かれて政治的な支配を受けたからである。1902年の独立後も、キューバは実質的に米国の保護国であり、主権を剥奪されていた。その支配—従属関係は、20世紀半ばにキューバ革命が起こるまで、半世紀以上も続くこととなる。

他方で、野球に関して言えば、それは米国によって押しつけられた文化ではなかった。従来の研究が米国のキューバ（中南米諸国）に対する経済的・政治的な支配の側面を強調してきたことを念頭に置くなれば、米国の帝国主義的な覇権体制が確立していくなかで、その構造下にあるながらも「自立的」に米国文化を実践したキューバ人の姿を描き出すことは、中南米諸国と米国、そしてキューバと米国の関係を再考するうえで、重要な意味を内包している。独立戦争期のキューバ人が「自立的」に野球を実践したことは、彼らとその文化を解釈あるいは翻訳し、前近代性の克服＝「進歩」、近代市民社会のモラル＝「洗練」、そして民族の解放＝「反スペイン」といった独自の意味を付与したことから理解できる。

以上をふまえると、19世紀末キューバにおける独立戦争とは、宗主国スペインからの独立を目指した闘いであっただけでなく、キューバ人が自らの文化を形成する契機であったともみなすことができる。独立戦争期を生きたキューバ人の野球選手や野球唱導者とは、スペインからの自由と解放を導き、近代的な市民社会の輪郭を描いた歴史主体であった。